

教 名 聞

第 76 号
(発行日)

2017年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日 午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日 午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日 午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

差違の苦を越える

人それぞれの人生、生活、境遇などはみなバラバラであり、違いがあります。めいめいの性格、容貌、体質はもとより、家庭状況、収入、社会環境、自然環境まで含めて実にさまざまです。なぜこの様に多様であり、差違があるのでしょうか。

その理由は、と問われると合理的な説明は非常に難しいと思います。

しかも、こうした違いがあるのは何故なのかという問いはなくなりません。

それでもその訳を仏教に問うてみると、それは一言で言うところ「業因縁」(業因・業縁)の故といわれています。

業因とは一人一人の善悪の行い(業)であり、その行いによって、行いの結果がその人の主体や境遇に現れてくるといわれます。たとえば、現在の境遇が恵まれているとすると、それは過去に為してきた自分の善なる行いが原因となつて、その結果が現在の私

の生活に差違が出てくる、と言うことは納得がいきま

す。しかしだからといって、一人一人の行いの善し悪しだけでその人の人生生活が決定されて来るのかというところ、そうではなくて「業因縁」の中の「業縁」が深く関わっていることも事実です。

業縁は、人が行為(業)する時、であうさまざまな外縁であり、また自らの行いに直接関わらずともふりかかってくる多くの外的な条件や出来事はすべて縁(条件)といつてよく、そういう意味で無数の縁が一人一人の人生生活に関わってくるというのも事実です。

たとえばどういう時代社会の中で生活しているか、ということもそうです。現代のシリアのような状態の中で生きるを得ないような人たちは、いかにまじめに日々を送っても、なかなか幸せにはなれず不安定な生活になりやすいでしょう。あるいは平穩無事な生活していた人が突然の地震や津波にあつて家族を失い財産を失う。あるいは健康で元気で働いていてもやっかいな病気に襲われる。あるいはまじめに働いていて収入が安定していても、世界経済の動向によつて会社の倒産にあい、リストラされて所得が激減するなど、いくらでもありえます。

だから自分の生活が「どうもうまくいかない」ということで、「それはあなたの責任ですよ」と言われると、イヤとはいえないのです。

確かに自分の過去の行いの善し悪しが現在の私の境遇全体の状況に関わっているということ、それは当然言えることでありましょう。そういう意味で「業因縁」の中で、人が行う「業因」(行いの因)によつて、その結果において人

たたとえばどういう時代社会の中で生活しているか、ということもそうです。現代のシリアのような状態の中で生きるを得ないような人たちは、

よるものでありましょう。いわば外からのいろんな偶然的な縁(偶縁)によつてそうなるのであるといえましょう。(こうしたさまざまな外縁も

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 中村穂積

土井眞由実 宮野勲

中川政二 吉田徳子

平成二十九年元旦

その人の過去の行為の結果であるという説もありますが、私はその説を取りません

そうすると人それぞれの生活に違いや差違が出てくるのは、「業因縁」によってである。と総括することできると思います。なお、業縁のことを世間では「運がいい」とか「運が悪い」とか言いますが、仏教では運とはいわず、「やってくるさまざま縁で」と言います。

こういう意味では人生生活の違いは、自己責任の部分もあれば、不可抗力の偶然的な縁によってであるとも言えます。では私の人生の幸不幸は、要するに「自分のせい」であったり「運命のせい」であつて、それ以外どうしてみようもないのであるかというところ、決してそうではありません。業因縁を説いて、人の幸不幸は業因縁によるのであつて、あとはそれぞれが自分の現在の境遇として受け入れるか受け入れないだけだ、とか、あるいはどんなに不幸であつても善を為し悪を慎む行いをしていくと、その結果幸せになるなどと説かれるのは真宗の

教ではありません。

そうではなくて、真宗は、どんな境遇の人（世間で言う幸福な人、不幸な人）であつても、現在「一人一人に阿弥陀仏がともに離れなくまします」という一点に気がつくかどうか、それが本当の幸不幸の分かれ目だということです。たとえ世間でいう不幸な境遇にある人も、その人の足もとに阿弥陀仏がましまして摂め取つて下さつていられること。この有難い事実が気がつくこと、それが決定的に大事なことだ。

阿弥陀仏ははかりないのちであり、慈悲であり、智慧であつて、阿弥陀仏にであう人はその功德に預かります。そこに不幸（悪）は転じて徳（幸い）となるという転悪成徳の利益（智慧）が与えられます。

では、外縁によって重度の障害者になり、ただ生きていくだけで、阿弥陀仏との出会いが自覚的に不可能と思われる人の場合はどうでしょうか。そういう人はまた次の世で人間に生まれて、そこで阿弥陀仏にであうことが可能でありましょう。生は一回限りではありませんから

（了）

十方無量の菩薩衆

（和讃問答）

十方の無量菩薩衆

徳本うえんためにとて

恭敬をいたし歌嘆す

みなひと婆伽婆を帰命せよ

浄土和讃

（語句）婆伽婆——世尊という意味で、ここでは阿弥陀仏のこと。

（現代語訳）——十方から弥陀の浄土へ往詣する無量の菩薩たちは、功德を修するため弥陀を尊敬して、口にも心にもほめたたえる。このような弥陀仏をたのみとせよ。

（参考資料）香月院深励師『浄土和讃講義』より。

「もろもろの菩薩十方より往詣して、弥陀仏を供養したてまつり、すなわちその供養はあるいは音楽を奏して仏を歌嘆し、あるいは天の妙華・宝香・無価衣をもつて如来を供養し、極楽浄土の微妙難思議なることを讃歎す。その時に心に思召すよう（我らも何とぞ、この極楽のような浄土

を建立したい）と思し召す」

* * *

N 「このご和讃の内容はどういう意味ですか」

D 「十方世界の仏国より無数の菩薩が阿弥陀仏の極楽浄土に詣で、阿弥陀仏を敬い、供養し、阿弥陀仏とその浄土をほめたたえられるのです」

N 「どのようなにほめたたえられるのですか」

D 「音楽を奏で、花を散らし、お香を焚き、素晴らしい衣を阿弥陀仏におかけして供養し、阿弥陀仏とその浄土をほめたたえられるのです。そのような無数の菩薩方に讃歎される阿弥陀仏（婆伽婆）によりたてまつれと、聖人はお勧め下さる、そういうご和讃です」

N 「これはどこに出ている内容なのですか」

D 「仏説無量寿経の中に説かれている往観偈という偈文に説かれています。無量の菩薩が阿弥陀仏と阿弥陀仏の浄土を讃歎し、そして（我らも何とぞ阿弥陀仏の極楽浄土のような国を建立したい）という願いを起こされる、と」

N 「十方世界の菩薩方は阿弥陀仏の浄土に往き、（私の国も阿弥陀仏の浄土のようにしたい）という広大な願いをおこされるのですね」

D 「ええ、そうです」

N 「ここで十方世界の菩薩方といわれていますが、この娑婆世界の衆生で、阿弥陀仏の本願を信じて正定聚に住するお方は菩薩とはいえないのでしょうか」

D 「『愚禿抄』に聖人は信心の行者について

汝の言は行者なり、これすなわち必定の菩薩と名づく

といわれ、凡夫でありながら信心の念仏行者は（必定の菩薩）であるという意味がそこにあるといわれています。ですから、この十方世界の菩薩方の一員に、信心の行者もあらしめられていると理解してもいいのであります」

N 「そうしますと、信心の行者が阿弥陀仏の浄土を聞き、その願心を知ると（我らも極楽浄土のような国を打ちたてたい）という願いを起こすと言い得るのですか」

D 「極楽浄土に実際に未だ往生していませんが、阿弥陀仏のお心にこの世で触れ、阿弥陀仏の浄土の相があるべき領

域であるとお聞かせていただき、お浄土こそあるべき世界であると感ずるなら（私たちのこの娑婆世界も浄土のようでありたい）と願うようになる、といえましょう」

N「では極楽浄土は具体的にどういふ世界でしょうか」

D「それについては仏説無量寿経に浄土の相（姿）が説かれていますが。法蔵菩薩は四十八願を起こされ、それを成就されたのが極楽浄土です。浄土の功德は無量でありましようが、無量寿経に説かれて二・三の例でいえば、四十八願の中に

第一願 たとい我、仏を得んに、**国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。**（口語訳——わたしが仏になるとき、わたしの国に地獄や餓鬼や畜生のものがあるなら、わたしは決してさとりを開きません）

第四願 たとい我、仏を得んに、**国の中の人天、形色不同にして、好醜あらば、正覚を取らじ。**（口語訳——わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々の姿かたちがまちまちで、美醜があるようなら、わたしは決してさとりを開きません）

N「たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」と第一願に説かれて

いますね。すると浄土は地獄・餓鬼・畜生が無い国であるとのことですが、それは現代に生きる私たちにどういふ意味がありますか」

D「もともと第一願は、法蔵菩薩が極楽浄土を建立し、その浄土に生まれるならば、浄土では地獄の衆生、餓鬼の衆生、畜生の衆生は一切ない。

そういう浄土にしたいと願われて、その願が成就して浄土は建立されている、と説かれています。そこで現代に於いての意味という視点でいえば、まずこの願の地獄についてですが、地獄の衆生はお互いが憎しみあい、害しあい、殺し

あつてる状況、いわば悲惨な戦争状態をつくりだしている。ですので戦争の無い極めて平和な世界が浄土でありましよう。大無量寿経には、浄土は

（兵戈用いることなし）と説かれ、軍隊も兵器も無い平和な世界と示されています。そうしますと阿弥陀仏の本願をお聞かせいただいた私たちは、戦争や紛争の絶えないこの世界を、害しあうことのない平和な世界にしたいと願わざるをえません。少しでもそのような状態に近づけていきたいと願わざるを得ないのでありましよう」

N「では次に、餓鬼の無い浄土にしたいという阿弥陀仏の本願にふれるとどういふ願いが私たちに起こるのでしよつか」

D「餓鬼は、食欲の煩惱によつて食つてやまない浅ましい者、それが餓鬼でしょう。浄土は餓鬼のいない世界と説かれています。こうした浄土の姿を聞いて、餓鬼のようになつて財物をむさぼり合うことなく、奪いあうことなく、収奪することのない、そういう餓鬼のいない浄土のようになつて、この娑婆を少しでも近づけたいという願いが当然起こるのでありましよう」

N「では畜生のいない浄土にしたいという本願を聞く者はどういふ願いが起こるでしよつか」

D「牛や豚のように他者に飼われて不自由な在り方をしていふもの、それが畜生です。浄土は畜生のいない世界にしたいというのが法蔵菩薩の願であり、その願を聞く私たちは、この娑婆も畜生のような状態の者がいない世界にしたいという願いが起こらざるを得ないので。畜生とは、支配者（あるいは階級）によつて支配される者、自由を奪われた者たちのことといえましよう。権力者によつて抑圧され、自由を奪われて隷属せしめられている人たち、そういう人たちのいない世界を願つて生きる。それが本願に触れた者に起こる願いでありましようし、あるべきであります」

N「では たとい我、仏を得んに、**国の中の人天、ことごとく真金色ならずんば、正覚を取らじ。**（口語訳——わたしが仏になるとき、わたしの国の中の天人や人々がすべて金色に輝く身となることのできないようなら、わたしは決してさとりを開き

ません）

D「この二つの願を聞くと、浄土には身体的な色や形状によつて、差別されることの無い世界が浄土なのだよと知らされます。人類の歴史、人間生活の上で、一人一人の肌の色、姿・形の良し悪しでどれほどお互いがその優劣によつて、おごつたり、劣等感をもつたり、あるいは軽蔑されたり、差別されてきたでしよつか。そしてこの（好醜）とは美醜のことですが、美醜によつてお互いが思い煩つてきたのが私たちです。こうした優劣や美醜での差別の無いのが浄土です。ですから弥陀の本願を聞く私たちは、そういう色や形の良し悪しに対する差別感がなくなり、自分も他者も平等に見るようになる。そういう状況にすべての人があるように願つて生きる、それが願わしいと知らされます。それが本願を現在に聞いて信順する者の願いとなるはずであります」



札幌別院での法話

(以下の文章は昨年(一九七〇年)の十月、札幌別院での法話を別院の職員の方がまとめて下さったものに多少手を加えたものです)

* * *

法蔵菩薩は私たちに代わってご修行をされ、南無阿彌陀仏を仏因として仕上げ、それを私たち一人一人に与えて下さいます。

それが皆さんの口から出て下さるお念仏なのです。念仏を称えると自分の耳にナムアミダブツと聞こえてきます。これは阿彌陀様が私たちに喚びかけて下さる阿彌陀様ご自身のお言葉なのです。口に称え耳に聞こえるお念仏がどう仰せ下さっているのかを聞く、これが聞法の要です。

お念仏はひと言でいうと「助からぬ汝を助ける」という大悲の誓いのお言葉です。

阿彌陀様がそう仰せられるのは、私たちは助からない者だからです。

そう仰せられても、「私は今困っていません」と思いがちですが、凡夫は阿彌陀様から見れば救われがたき心の重病

人なのです。私たちは自分がどんな存在なのか分からないのです。自分を、そここまちな人間で、人に親切ができて、自分の考えは間違っていない。そして自分で自分を助けることができると思っているのです。

だから、お念仏が「ナムアミダブツ、まるまる引き受ける」と仰せられても、「間に合ってます」と、拒絶しているのです。しかし、私自身には浄土に生まれる種は一つもなく、縁がくれば親をも殺しかねない可能性を持ち、本願を疑い続けて来た救われがたき存在なのだ、阿彌陀様は見ておられるのです。

また、私たちは真面目に聞法し、仏法を信じて、阿彌陀様(仏法)を掴んで助かろうとします。

しかし阿彌陀様は掴めません。仏教の話は山ほど聞いても、本当のところは何も分かっていないという私がどうしても残るのです。

そんな私に阿彌陀様は「分かれ」とも「自覚せよ」とも

おっしゃらない。何も条件を付けずに、分からないまま「そのままなりを引き受ける」とまで仰せ下さり、助ける仕事を全部受け持つて下さるので

そこに、私からは掴めないにもかかわらず、阿彌陀様が私をおさめとつて下さっていることを、はからずも知らされるのです。

ところが阿彌陀様のこの仰せは、自分の傲慢な考えのためになかなか聞こえないのです。

京都の親鸞聖人のもとに「本当にお念仏で浄土に生まれることができるのですか」と、関東からお弟子さんたちが命がけて訪ねてきました。

昔の人も現代の人も、真剣であれば必ずこの問いが出てきます。

しかし聖人は、念仏は本当に浄土に生まれる種か地獄に落ちる業か、私は全く知らないと言いつつ切られました。念仏で浄土に生まれるかどうかを決定するのは愚かな私では無い、決定したもうのは阿彌陀様ご自身だと。私は阿彌陀様の「そのままなりで助ける」という大悲の決定にただ信順

しているだけだといわれるのです。ここを聖人は「信ずる

ほかに別の子細なきなり」と仰せられています。

喩えば、私が真つ暗な海に放り出されて、今にもおぼれようとしている時に、大きな船が来て「向こう岸に渡すからすぐ乗りなさい」と言われて、「この船は本当に連れていってくれるのだろうか、大丈夫だろうか」などとぐずぐず思案してすぐ乗らないのは愚かなことです。「有難う」とそのまま乗るだけです。

念仏が本当に浄土に生まれる種かどうかを私が分かつてから、お念仏を受け入れようとしても、いつまでたつても受け入れることはできません。分からぬまま「そのままなりでまかせよ」の広大な大悲の仰せのままにおまかせするばかりです。

信心の問題で悩んでいる人が厚信の吉蔵同行を尋ねて「他力がどうしても分かりません」と苦衷を訴えたら、「他力か、わしも分からん。だけどな、分からんまんまで来いよが嬉しい」と言われたそうです。

これが信心の姿なのです。とかく人間は知性で納得して助かろうとします。仏法を聞いて納得したら受け入れよう、納得できなければ受け入れないというのは、仏様より

私が偉くなっている傲慢な姿勢です。

お念仏していることは、助かる特効薬をすでに手に持っているようなものです。あとはそれを「ハイ」と飲むだけ。南無阿彌陀仏はこんな私のためでありましたかと、聞き受けるだけです。

(了)

《遠方法話予定》二〇一七年

*二月十七日。岡崎教区。場所は未定。午前・午後。

*三月四日。福井別院。十時より一時まで。

*三月十七日。名古屋市。高畑聞法会館。十時より十二時半まで。

*四月十五日〜十六日。広島市。龍善寺。午後から午後まで。

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

《念佛寺刊行物》

*『木村無相 お念仏の便り』 永田文昌堂出版

*『真宗の念佛と信心』

*『真宗教学の諸問題』(一)

*『仏に会うまで』

*『松並松五郎念佛語録』 以上四冊は私家版